

「社会を見る3つの目」を育てる「市民」の学習

お茶の水女子大学附属小学校

佐 藤 孔 美

- I 「社会を見る3つの目」とは
- II 研究の発端と動機
- III 研究の方法
- IV 研究の実際
 - 1 「東京のごみ減量大作戦」の実践を通して（4年生）
 - 2 「賞味期限とかしこい消費者」の実践を通して（4年生）
 - 3 「日本の食糧自給率を高める工夫を考えよう」の実践を通して
（5年生）
 - 4 「携帯電話の優先席付近での使用問題を考えよう」の実践を通して
（5年生）
- V 研究の考察

I 「社会を見る3つの目」とは

「市民」の学習において、「社会を見る3つの目」は、民主主義社会の認識の仕方として基幹となる市民的資質であると考えている。では、その「社会を見る3つの目」を、下記に示す。

- ア 社会には、一個人の工夫や努力で、できることと、できないことがあること。
イ 個人の利害と社会の利害は、必ずしも一致しないこと。
ウ だから、世の中には、広い視野から社会を調整するしくみが必要であるとともに、一人一人の工夫や努力が必要であること。

II 研究の発端と動機

現在、お茶の水女子大学附属小学校には「市民」という学習分野がある。2002年度に社会科から学習分野「市民」が誕生したのだ。その誕生の年度の初めに、鳴門教育大学の小西正雄先生から新しい教科（学習分野）「市民」が始まるにあたって、その指針となるお話を聞かせていただいた。多様な価値観が存在する社会においては解決が困難な問題が多い。その社会において、必ず誰かが受ける不利益を、最小限にするためには、広い視野から社会を調整する仕組みが必要である。それが上記に掲げた「社会を見る3つの目」なのである。

また、小西先生のお話の中に、今までの自分の授業について考えさせられる場面があった。「小学校の社会科とか総合の授業を見ると、最後に先生方が必ず言いますね、『一人一人に何ができるか考えてみましょう』と。だけど、『じゃあ一人一人でできないことをどうするか』、と言うことが出てこない。一人一人にできることを考えて終わってしまうのです。子どもたちは、いろいろ考えて、空き缶を集めるとか、分別収集するとか、それは結構なんです、じゃあ一人一人にできないことがあったらどうするんですか。」（「本校 児童教育」13号より）

このお話が、私の授業について改めて見つめ直すものとなった。確かにそれまでは、例えば「ごみの学習」ならば、その終末に「ごみを減らすためにわたしたち一人一人にできることは何ですか」と発問し、いろいろなアイディアを出させ、「是非実行していこう」で終わっていた。しかし、それで終わっていいのか、ということを改めて考えさせられた。そこで、わたしたち「市民」部では、この「社会を見る3つの目」を育てたい大切な市民的資質の一つとして、実践を通して、育成に取り組んでいるところである。

III 研究の方法

2002年の「市民」の発足以降、「社会を見る3つの目」を育成するための単元開発を行い、授業に挑戦していき、現在もなお挑戦中である。以下、4本の実践を紹介し、「社会を見る3つの目」について考察してみたい。

Ⅳ 研究の実際

1 「東京のごみ減量大作戦」の実践を通して（4年生）

(1) 場面設定

東京はあと40年で埋め立て地がなくなってしまう。東京をごみの山から救うにはどうすればいいのだろう。自分の考えを根拠を明らかにして提案しよう。

(2) 本単元と本単元における「社会を見る3つの目」

日常生活の中での、子どもたちのごみに対する意識は、それほど高くはない。家庭での取り組みの様子を聞いても、紙ごみを古紙に出すという取り組みも、それほど多くはない。しかし、この関心・実行力の低さは、今、社会で切実な問題となっている「ごみ問題」に対する、事実認識の不足であると考え

る。
さて、東京23区のごみ処分場は、あと40～50年程で満杯になると言われている。この数年間で東京に住む人々や、東京都の働き、企業などの働きによって、ごみの量は年々減ってきている。約10年程前にはあと30年でいっぱいになると言われていた処分場も、40～50年まで延びたのである。このことを知れば、子どもたちも、ごみの問題に対して、自分でも社会をよくするために考えてみよう、プラス思考で取り組み始めるのではないかと期待をして、本単元を構成した。

本単元で育てたい「社会を見る3つの目」は、以下の通りである。

ア ごみを減量する問題は、一人一人の工夫や努力が大事であるが、それだけでは解決できないこと。
イ ごみの問題を解決していく時には、個人の利害と社会の利害は、必ずしも一致しないこと。
ウ だからこそ、お互いがどう「痛み分け」しあいながら、広い視野からごみの問題をよりよく解決し、調整していくかというしくみをつくる必要がある。それと共に、自分の所属する小さな「市民」社会（家・学校・地域）で、なかまと共にごみを減らそうというたゆまぬ実践をすることも必要であること。

ごみの問題を取り上げた学習では、終末に、「一人一人にできることは何か」を考え、まとめる展開が多い。しかし、上記のア～ウにあるように、一人一人でできないことをどうするのか、それを考えることが「市民」や社会科の役割である。本単元では、自分の所属する小さな「市民」社会（家・学校・地域）で、「なかまと共にごみを減らそうという、たゆまぬ実践をする」、そんな社会参加の意識を育てたい。それと共に、自分自身も、日々ごみを減らす努力をしながらも、「どんなに個人で努力をしても、絶対にゴミは出続けるんだ。それなら、どうすれば良いのか」を考えることこそ「市民」で学ばせたいことである。

(3) 単元の目標

- ・ごみ処理について調べ、これらの対策や事業が組織的に行われており、地域の人々の、健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解する。
- ・ごみを減らすための個人の取り組みや社会全体の取り組みを、見学や資料、聞き取り調査をもとに調べることができる。
- ・ごみを減らすためには、一人一人の努力や、社会全体の協力が必要なことを、具体的な策を通して考え、提案することができる。

(4) 本単元の流れの概要 (17時間)

	○学習指導計画・予想される児童の反応	・留意点
1	○教室にあるごみ箱をあけ、クラスで出るごみの量やごみの種類、またごみの出し方について見合う。 ・紙のごみが多いな。 ・まだ使えるごみがあるよ。 ・リサイクルできるごみがある。 ・正しく分けると、燃えないごみは少ない。 (みんなの家のごみ調べをしてみよう。…5日間)	・自分たちが何気なく出しているごみについて、関心を持たせるようにする。
2	○家から出るごみの量やごみの種類を1週間調べ、発表し、東京都全体のごみの量を考える。 ・多い家庭で5～8袋もある。 ・1家庭、だいたい2袋くらい。 ・80袋も集まると、こんなに多いのか。 ・もし、この中に本当にごみが入っていたら、臭いだろうな。 ・東京都のごみを全部集めたら、どれだけになるのだろう。	・実際に、5袋のごみ袋を用意し、見た目や量、臭い、重さなど感覚に働きかけるようにする。 ・東京都のゴミの量の多さを具体的・視覚的に見せ、実感させる。
3 ・ 4	○自分たちが出すごみはどこへ行くのか、その行方を調べ、中央防波堤の埋め立て地の様子を知る。 ・1日1万トンって、どれくらいなのだろう。 ・1日ごみ収集車が5000台必要だなんて、東京はすごいごみを出しているな。 ・全然、ごみを分別していない。 ・ビニール袋がたくさんある。 ・においはどうなのかな。 ・このまま行ったら、東京はごみだらけで住めなくなるかもしれない。 ・海の真ん中に埋め立て地があるんだ。 東京湾のゴミの埋め立て地の様子って、どんなだろう？	・ごみ処理が計画的・組織的に行われていることをつかませる。 ・写真から中央防波堤の様子をじっくり眺めさせる。
5	○中央防波堤の見学の前に、疑問点や調べたいことを明らかにする。	
6		
7 8	(校外学習…中央防波堤、夢の島、新江東清掃工場)	
9	○中央防波堤外側埋め立て処分場を実際に見て、感想を述べ合う。 ・ものすごいごみだった。 ・においが強烈だった。 ・中央防波堤外側埋め立て処分場は平成15年度でいっぱいになってしまう。 ・新海面処分場がゴミでいっぱいになったら、東京都はごみを捨てる場所がなくなってしまう。 ・あと、40年たったら、東京は埋め立て地がなくなってしまう。	
8	東京はあと40年で埋め立て地がなくなってしまう。東京をごみの山から救うにはどうすればいいのだろう。 (第一次意思決定の場面)	

	<p>○自分たちの生活を振り返ってできることを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食や弁当は残さないようにする。 ・リサイクルすればいいい。 ・ごみを出さないようにすればいいんじゃない。 ・買い物に行くときに袋をもっていく。そうすれば、ビニール袋のごみはなくなる。 ・詰替用の洗剤やシャンプーを買う。 <p>○自分たちだけでなくみんなでやっていかなければならないことを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・埋め立て地をもっと海に作る。 ・他の県にごみをもっていく。 ・ごみがでないような品物を作っていく。 ・ごみを出すとお金がかかるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見学時にヒントをもらったことを思い出させる。 「昔は、誰もごみだらけに wasn't かった。」 「埋め立て地も必要 wasn't かった。」 ・自分たちの生活を振り返らせてできることを考えさせる。
9 ・ 10 ・ 11	<p>○実際にどんな取り組みがなされているか調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの身近なところでなされている取り組みについて調べよう。 ・昔のごみがでなかった時代の生活を調べよう。 ・他の市町村のごみ減量対策を調べよう。 ・海外、特にドイツのごみ対策について調べよう。 <p>(ここで、夏休みに入ったので、各地方でのごみの減量の取り組みを調べたり、実際にごみを減らすための計画書を作らせ、取り組むように促した。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・帰国学級の子ともたちとも交流させ、海外の様子を調べるようにさせる。 <p>○夏休みを生かして、宿題を呼びかけた。</p>
12 ・ 13	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>東京をごみの山から救うにはどうしたらよいだろう。</p> <p>東京のごみ減量大作戦の案を考えて、みんなに提案しよう。</p> <p style="text-align: right;">(第二次意思決定場面)</p> </div> <p>○自分の生活を振り返ってできることを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食やお弁当を残さないようにする。 ・紙ごみを減らす。(一番多いから) ・紙の裏側に文字を書く。 ・生ごみは肥料にする。 ・むだなものは買わない。 ・ものをすぐ捨てないで、大切に使う。 ・買い物かごを持っていく。 ・リサイクルをしっかりとる。 ・よけいなものは買わない。 ・着られなくなった洋服はバザーにだす。 <p>○みんなが考えたことが本当にできるのか、菓子箱に入った菓子とそうでない菓子を買うという場面を作って考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・味は同じなのだから、菓子箱に入っていなくてもよい。 ・菓子箱に入っている方が買いたくなる。 ・菓子箱に入っている方がおいしそう。 ・やっぱり、菓子箱に入った菓子を買う。 <p>○自分たちだけではなくみんなでやっていかなければならないことを考え発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーではレジ袋を出さない。 ・ごみがでるものはつくらない。 ・ごみを出すとお金がかかるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えは、できるだけ自分の生活場面に即しながら、具体例をあげながら述べられるようにする。 ・意見の対立があるときは取り上げ、みんなで考え、なにが問題なのか話し合う。 ・ごみを減らすことは、容易なことではないことを実感させる。 ・子どもたちの心に揺さぶりをかける。 ・一人一人の努力では

	<ul style="list-style-type: none"> ・ごみを山に持って行って捨てる。 ・新しい埋め立て地を作る。 <p>○本当に、自分たちが考えた案が実現できるのか、考えてみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが協力すればできるよ。 ・一人ががんばっても、みんながやらなければだめだよ。 ・やっぱりできないよ。 <p>○自分たちが考えた案がより実現していくために、他の市町村、外国、または昔の取り組みを調べて、本当のごみ減量作戦を立てることを予告する。</p> <p>○調べたことをもとに、自分の考えをまとめ、提案する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドイツのようにはじめからビンにお金をかけておけば、みんなポイ捨てしないのではないか。 ・ドイツのようにものを作る人が、ごみがでないようなものを作ればいい。 ・水俣市のように細かく分別することも大切。 ・昔のようにごみのでない生活を見習っていくべき。 ・一人一人ができることはしっかりやっ払いこう ・でも一人一人では解決できないこともある。それは、社会全体で考えていかなければならない。 	<p>できないことがあることに気づかせる。</p> <p>・水俣市が24分別回収をしたことで埋め立て年数を15年ものばしたことを知らせ、自分たちが考えた案が、決して理想で終わらないように、次への意欲づけをさせる。</p>
14	<p>○一人一人の努力でできることと、そうでないものがあることを知り、社会全体でやっていかねばならないことを実現させるためのしくみを知る。</p>	<p>・個人でできることと社会全体で考えていかなければならないものを明らかにさせていくよう働きかける。</p>

(5) 実際の学習の展開

東京はあと40年で埋め立て地がなくなってしまう。東京をごみの山から救うにはどうすればいいのだろう。
(第一次意思決定の場面)

○自分の生活を振り返ってできることを考えよう。

- ・給食やお弁当は残さない
- ・生ゴミは土にうめて肥料にする。
- ・紙の裏面に文字を書く。
- ・むだなゴミを捨てない。
- ・もっとリサイクルする。
- ・ゴミを出す回数を減らす。
- ・豆腐はナベを持って買いに行く。
- ・むだなものを買わない。
- ・スーパーへはマイバッグを持っていく。
- ・会社がゴミになるものを作らない。

☆「世の中には一人一人の工夫や努力でできることがある」ことをとらえる

↓しかし、現実にごみはなかなか減らない。

○どんなことが問題だろうか。

- ・相変わらずペットボトルのリサイクル率は23%。
- ・どんなに自分がごみを減らそうと思っても、ほかの人もしゃや無理。
- ・買い物袋を有料化しても、そのスーパーに人が来なくなってしまうと、そのスーパーが損をする。全部のスーパーがやらないと無理。

☆「世の中には一人一人の工夫や努力ではできないことがある。」ことをとらえる

↓「ごみを減らすための工夫なんてできっこない。一人では無理。」

「もう解決方法はないのだろうか。」→（教員から）「こんな取り組みがあるよ」

〈ドイツの例〉・買い物袋の有料化（全店で） ・国をあげての取り組み・ゲルベザック	〈水俣市の例〉 ・24ごみ分別回収・トレイの廃止
・ドイツがこんなにがんばっているのだから日本ももっとがんばらなくてはいけない。 ・水俣市は分別を細かくして埋め立て期間を15年ものばしたというのはすごい。 ・実際に取り組んでいるところがある。何かできるかも…。 ・夏休み、いろいろな場所へ行ってみよう。どんなことが取り組まれているだろう。	

○夏休みごみ減量体験

○夏休みに各地のごみゴミ減量報告書を作成

- ・リサイクルと生ごみを肥料にすることで、ごみが今までの3分の1になった。
- ・いろいろなところで、ごみを減らすために多くの工夫がされているんだと思った。

↓

東京をゴミの山から救うにはどうすればよいのだろう。体験したことや調べたことを元に考え、提案しよう。
(第二次意思決定の場面)

第一次意思決定 (話し合い)	○ 児 リサイクルする。	M 児 給食や弁当は残さず食べるようにする。	S 児 工場がごみを出さないものをつくったらい。
	↓	↓	↓
第二次意思決定	いらなくなったものを自分でもリサイクルする。名づけて「自分リサイクル」	国がルールを決めて、社会全体でもっと取り組んでいかなければならない。	たかがスーパーの袋といっているが、1年には5千万枚がごみになっている。マイバックを使おう。

(第一次意思決定からどのような考え方の変容があったのかみてみた)

☆「だから、世の中には広い視野から社会を調整する仕組みが必要である。とともに、一人一人の個人の工夫や努力が必要である」ことをとらえる

(6) 考察

実際、学習を進める中で、子どもたちはこの「3つの社会を見る目」をそれぞれ行きつ戻りつしながら思考していることがわかった。それは第二次意思決定の場面での子どもの考えの変容から伺われる。すなわち、M児は、一人一人の工夫や努力から、今やごみ問題は個人の努力だけでは解決できないところまできているのだと考えた。また一方で、S児は、はじめに企業側もごみを出さないようにもっと工夫しないとダメだと思ったが、最後はわたしたち一人一人の努力が大事であると考えている。最後に、O児は、はじめから一人一人の工夫や努力が最もごみを減らすためには大切という考えである。これは、日本のごみ問題が各市町村によって取り組み方が違い、まだまだ法的な整備、設備投資、リサイクルの基盤が行われていないこの難しい現状にある中で、O児なりの解決法だったのかもしれない。

2 「賞味期限とかしこい消費者」の実践を通して(4年生)

(1) 場面設定

「スーパーで手前に並んでいる古い牛乳を買う」という買い方は、かしこい買い方だろうか。様々な人の意見を聞いたり、これに関する事実を調べたりしながら、自分の考えを根拠を明らかにして提案しよう。

(2) 本単元と本単元における「社会を見る3つの目」

「賢い主婦はスーパーで手前に並んでいる古い牛乳を買う」

(06/12/31 東京新聞「社説」より)

日本新聞協会が募集した「新聞広告クリエイティブコンテスト」の最優秀賞に選ばれた作品「エコ買い」の惹句である。牛乳パックに記したこの言葉の横に次のような説明書きがある。

〈自宅の冷蔵庫では古い牛乳から飲んでいるのに、スーパーでは新しい牛乳を買っていませんか？新しいのから売れていくと、そのぶん古い牛乳は売れ残ってしまいます。〉

〈日本では毎日約2000万人分の食料が、賞味期限切れなどの理由で捨てられています。できるだけ売り場の古い牛乳を買きましょう。〉

この単元を行った4学年の子どもたちは、3学年時に「かしこい買い物の工夫」で「新鮮なものを選ぶ」大切さを確認し、賞味期限をよく見て買い物をすることを学んだ。しかし、今回のこの惹句は、子どもたちの学んだことを覆す考え方である。みんな新鮮なものは買いたい。しかし、実際は、新しいものを選ばないことで多くのごみが出る。そんな「自分の都合」と「みんなの都合」の狭間の中で、価値判断をさせ意思決定をさせたい。

また、以前からごみ問題をはじめとする生活に関わる様々な問題は、一度学習をしたら終わってしまうのではなく、リフレクションをしてさらに考えるチャンスを設定する必要性を感じていた。3学年時で受け持った子どもたちを4学年時でも担当する機会を得たので、昨年度学習したことをもとに、ごみ問題を再度子どもたちと、また違った角度から考えていきたいと考えた。そして、この単元における「社会を見る3つの目」は、

- ア 古い牛乳から買った方がいいことには決まっているが、やはり新しい牛乳を買いたいと思う葛藤があること。
- イ 消費者は、新しい牛乳を買いたいと思う。しかし、スーパーは、消費者に古い牛乳から買ってほしい。個人の利害と社会の利害は、必ずしも一致しないこと。
- ウ だから、古い牛乳が余らないように、スーパーや小売業は工夫すると共に、一人一人の意識も社会全体を考えて変わっていく必要があること。

(3) 単元の目標

- ・「エコ買い」の惹句から、買い物とごみ問題にさらに関心をもつ。
- ・ごみを減らすための個人の取り組みや社会全体の取り組みを、見学や資料、聞き取り調査をもとに調べることができる。
- ・ごみを減らすためには、一人一人の努力や社会全体の協力が必要なことを、具体的な策を通して考え、提案することができる。

(4) 子どもの学びの履歴

この単元を学習した4学年の子どもたちは、3学年時に「くらしと買い物」の学習の中で、「買い物の工夫」の一つとして、マイバックを持っていくことの事実、その意味について考えた。そして、買い物

とごみの問題は決して切り離せないということから、「くらしと買い物」の学習後、ごみの問題の学習に繋げていっている。

(5) 本単元の流れの概要（7時間程度）

- ① 前年度のごみの学習を振り返り、継続していること、継続していない場合の理由などを話し合う。
- ② 「かしこい買い物の工夫」を思い出し、エコ買いの惹句を紹介し、それについて話し合う。
- ③④⑤⑥ 自分たちの考えをさらに根拠のあるものにしていくために、実態調査の計画を立て、調べる。
 - ・家の人や近所の人の考え
 - ・スーパーでのインタビュー
 - ・お店の人の考え
 - ・廃棄される品物の数や量
- ⑦ 調べてきたことを発表し合い、再度エコ買いの惹句について自分の考えを述べる。（本時）

(6) 実際の学習の展開

① 第1時

- 一年前に取り組んだ「ごみの学習」以降、ごみを減らすためにやっていることはあるか、発表しあう。
 - ・スーパーのリサイクル箱に、ペットボトルや牛乳パックなどを入れている。
 - ・スーパーでは、ビニール袋をもらわない。
 - ・コンポスト（生ごみを肥料にして植物に与える）を買って、生ごみをうまく使っている。
 - ・食べ物が残らないように食べている。
 - ・「袋はいりません」と言う。
 - ・もらったビニール袋をさらに活用している。
 - ・トレイ、ハンガーなど工作に使うようにしている。

② 第2時

- かしこい買い方を学習したことを想起させ、『「スーパーで手前に並んでいる古い牛乳を買う」という買い方は、かしこい買い方だろうか』の句を紹介し、自分の考えをノートに書き、発表しあう。

かしこい（20人）	かしこくない（17人）
<ul style="list-style-type: none"> ・古いものを少しでも減らさないとスーパーは古いものを捨てなければならない。 ・後の人のためにも考えているから。（でも自分にとってはいや） 	<ul style="list-style-type: none"> ・より新しいものを買った方がよい。 ・飲み切れない時に消費期限が早く終わる。（※この後で賞味期限と消費期限について確認し合う。） ・期限が切れたら、捨てなければならない。

③ 第3時

- 家の人たちへインタビューしてきた子どもたちに発表してもらう
- この問題について、さらに調べてみたいことを発表し合う。
 - ・賞味期限と消費期限の違い
 - ・いろいろな人の考え
 - ア、家の人 イ、近所の人 ウ、学校の先生方
 - エ、お店の人 オ、大学の中の人
 - ・食べ物（牛乳）がどのくらい捨てられるのか
- 上記の課題を、ファミリー（4人グループ）で協力しあって、課題を決めて調べることにした。

④ 第4・5・6時

●それぞれの課題について、さまざまな方法で調べたり、まとめたりする。

Aグループ 賞味期限と消費期限の違い

- ・賞味期限・消費期限の言葉の意味を調べる。
- ・賞味期限と表示されているもの、消費期限と表示されているものを、家の冷蔵庫の中やスーパーなどであらかじめ調べてくる。

Bグループ 店の人の考え

- ・自分の家の近くのスーパーやコンビニで調べてくる。
- ・実際に店の人にインタビューしてくる。
- ・牛乳の並べ方や売り方を見る。
- ・お客さんがどんな風に牛乳を買っていくのか見る。

Cグループ いろいろな人の考え

ア、家の人 ……クラス全員の家の人の意見を一人ひとり聞きまわり、それを集計したり、考えを一覧表にする。

イ、近所の人

ウ、学校の先生方…あらかじめ誰がどの先生にインタビューするのか分担し合い、休み時間にインタビューしに行く。

エ、お店の人 ……お店のグループが担当する。

オ、大学の中の人…大学構内で、小学校の前を通る、大学の先生、大学生、一般の方々に聞いてみる。

Dグループ 食べ物（牛乳）がどのくらい捨てられるのか

ヒントとなる資料を教員のほうから与え、それをきっかけに、友達にわかりやすく伝えるためにどう表現して表したらよいのか、さらに疑問に思ったことなどを調べる。

最初はどんな風に調べていけばよいのか、話し合うものの、実際に行動にはなかなか移せなかった子どもたちであった。しかし、それぞれのグループに助言することで、少しずつイメージがわいてきたようだった。調べ学習の2回目のときに、いろいろな人に聞いてみたいが、なかなか聞けないと言うグループがいた。本校の大学構内には大学生・様々な校種の先生方、守衛さん、保護者などが出入りしているので、その方たちに聞いてみたらとアドバイスした。早速大学構内に出て、積極的にインタビューしていた。実際の声を聞くことで、この問題がより切実感をもってきたようであった。

⑤ 第7時

子どもたちは、友だちに自分たちの考えをわかってもらうために、資料を作って自分たちの考えを提案することができた。

本時のはじめの段階では、「かしこい」派が15人、「かしこくない」派が18人であった。

アの資料は、Cグループの先生たちの意見をまとめたものである。身近な人たちの意見ということで、まず子どもたちの関心をひいた。自分たちと同じ「かしこくない」と答える先生方、「どちらでもない」という消極的な意見に自分も同じであると妙に納得する子どもたちがいる一方で、「かしこい」買い方をしている先生方がすでにいると言うことは、子

(資料ア)

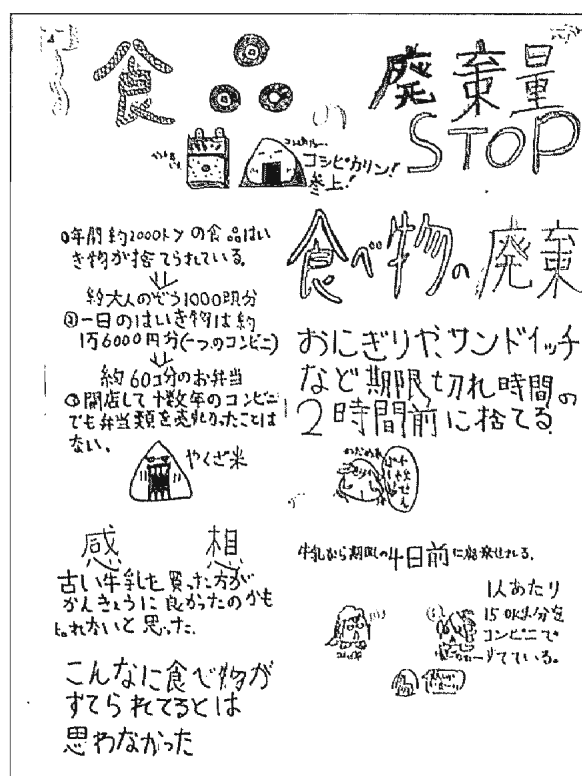
かしこい		かしこくない	
先生	理由	先生	理由
A 先生	いていえるから。	F 先生	飲みきれないから。
B 先生	すぐ飲めるようにしたいから。	G 先生	ない
C 先生	すぐ飲むから。(牛に合うから)	H 先生	ついついどしどし
D 先生	かんきょうにいいから。	I 先生	飲みきれないから
E 先生	先にしてない。	一般の人	理由
男性	みんなに目がかわらない。	少年	仕事がいそいそしくて飲む時間がないから。
女性	お金のことを考えるのはすかしくない。	夫婦	しんせんな物を飲まないと
		その他	おいしいし、でこのと飲みたいから

どもたちにとっては驚きでもあったようだ。

次に、イの資料は、Dグループの食品廃棄物の量を調べたものである。年間2000トンの廃棄物を出していること、それがよりわかりやすく「ゾウ1000頭分」というのもインパクトがあったようである。

このように、話し合いは進んでいき、「かしこい」買い方であるという意見が強くなってきた。しかし、「かしこい」買い方の方を選んだ子どもが、「でもやっぱり買うときは、新しい方買っちゃうかも…」とつぶやいた。それが本音である部分は大きいであろう。

(資料イ)



(Dグループ 発表資料)

●【この学習を終えた子どもたちの考え】

実際初めは、「そんなこと考えるの? いいじゃん別に…」って感じで、ほとんどどうでもよくなって、関係ないようなことを言っていました。でも、学習していくうちに、だんだん自分でも関係あるし、自分が前のものを取るだけでも、ごみは減ると思いました。そして、店員さんが、いろんな工夫をして、古いものを買ってもらおうとしているのがわかりました。そして、他のものも同じように並んでいました。またもっと調べたいです。(K児)

私は今思えば、前は「かしこくない」と思っていたけど、調べていったら、いつのまにか「かしこい」になっていました。アジアゾウ400万頭分の数え切れないほどの食品廃棄物が出るからです。この学習で良かったことは、こんなことを調べていなかったら、私はずっと「かしこくない」方だったと思います。牛乳は賞味期限の4日前に捨ててしまうと書いてあったので、びっくりしました。これからごみを減らすように努力したいです。(I児)

(7) 考察

「スーパーで手前に並んでいる牛乳を買うことはかしこい買い方か」という問題は、子どもたちに葛藤を引き起こした。手前に並んでいる牛乳を買うことがよいと言うことは、頭で理解した。しかし、本音と建て前は違う。やっぱり実際に買うときは、より新しいものを欲して、奥の商品から買いたいという思いは十分ありうる。でも、この授業をしたことで、子どもたちは牛乳を買うときにジレンマを起こすことがあるかもしれない。それだけでも大きな成果であると思う。

自分にとってはいやなことも、社会全体のためにはいいと言うことの中で、どう葛藤を起こし、よりよい方法を自分なりに考えていくことができることを、子どもたちに大いに期待したい。

3 「日本の食糧自給率を高める工夫を考えよう」の実践を通して(5年生)

(1) 場面設定

日本の食糧自給率を40%から50%にあげるためには、国、企業、農家、消費者のどの立場がどのようなリーダーシップを発揮して取り組むとよいだろう。自分の考えを根拠を明らかにして提案しよう。

※1日1食米飯を増やすと、自給率は2%アップすると言われている

(2) 本単元と本単元についての「社会を見る3つの目」

日本の食糧問題は、昨年(2007年)ころから、新聞やニュースでも度々報道される今話題の問題である。しかも、世界の先進国の食糧自給率がオーストラリア237%、フランス128%、アメリカ122%、ドイツ84%、イギリス70%の中、日本はわずか40%(2007年)で、各国が食糧自給率の維持・向上に向かう中、日本は低下の一途をたどっている。これからの社会で生きていく子ども達にとっては、切っても切り離すことができない大変重要な問題である。その身近な問題から自分の主張を根拠を明らかにして行う中で切実感を持たせ、調べることの楽しさを感じさせたい。そして、集めた情報を相手にわかりやすく伝えるためにどう情報を加工するかじっくり考えさせ、それを自信を持って発言できる場をつくっていききたい。

ア、日本の食糧自給率をあげるためには、消費者一人一人の工夫や努力で、取り組めることと取り組めないことがあること。

イ、日本の食糧自給率をあげるために個人が努力することと、利潤追求のための食糧の大量廃棄等の問題をかかえる社会の仕組みの中では、個人の利害と社会全体の利害は、必ずしも一致しないこと。

ウ、だから、日本の食糧自給率をあげるためには、国・企業・生産者など広い立場から社会を調整するしくみが必要であると共に、消費者一人一人の工夫や努力も必要であること。

(3) 単元の目標

- ・根拠となる情報を明らかにして、自分の考えを主張することができる。
- ・友だちの主張に対して、反論したり、自分の考えと関連させて、自分の考えを深めることができる。
- ・食糧自給率の問題を例として、「社会を見る3つの目」について、自分の言葉で説明することができる。

(4) 子どもの学びの履歴

1学期の食糧単元では、以下のように学習を進め、食糧自給率にも多少は触れた。

第1ステージ:「お茶の水女子大学附属小学校の5年生では、和食料理店『〇〇〇』を開店します。

『これぞ和食!』と、皆がおどろくメニューをつくりたいと思います。ただし、和食料理ですから、すべて国内生産された食材を使うことにします。メニューを提案してみましよう。』

第2ステージ:「和食料理店『〇〇〇』では、食材にこだわります。いよいよ開店に向けて食材を買い出しに行きます。そこで次の①から③について、計画を立てなさい。①どんな食材を②どこの都道府県から③どのような交通手段を使うのか」

第3ステージ:「和食料理店『〇〇〇』では、和食の食材にとことんこだわります。自給率100%を達成している食材だけを使用して、そうでないものはメニューからなくしてしまいます。食材の自給率の資料を調べてメニューを残すかどうか判断しましょう。」

(5) 学習指導計画（8時間程度）

- ① 世界や日本の食糧自給率の現状や問題点について知る。
- ② 日本の食糧自給率の低い原因について調べる。→場面設定に出会う。
- ③④⑤ 第一次提案の根拠となる事実を集め、それらの事実を加工しながら、自分の考えをより説得力のあるものにする。
- ⑥⑦ 第二次提案を行い、友だちの考えとの共通点や違う点を明らかにして自分の考えをふり返る。
- ⑧ 第三次提案に向けて自分の考えを最終的にまとめる。

(6) 実際の学習の展開

- ① 日本と世界の食糧自給率の現状について知り、日本の自給率が低い理由について資料から読みとり、日本の食糧自給率問題について自分の考えを書く。

【子どもたちの感想より】

- ・「日本は他の国に比べて食糧自給率がこんなに低いとは初めて知った。今後をもっと調べていきたい。」
- ・「自給率が40%なら他の60%はすべて輸入品だから、ぼくたちが食べているものは、ほとんどが外国のものだということはびっくりした。」
- ・「日本はいろいろな条件があって農業がしにくいのが、輸入がストップしたときのことを考えると深刻な問題。」
- ・「日本は自給率が少ないのに何かしないのか。40%しかなくて悔しい気がする。どうすれば自給率が増やせるか。」
- ・「みんな安いアメリカ産を買うから、お金が日本の農家にあまりいなくなるのだから、生活も苦しくなるから作る人が減っている。」
- ・「日本が食糧自給率が低いのは前の学習でわかっていたけど、解決する必要があることや人間の方ではどうにもできない地形のことがあり、深刻な問題だと思った。」
- ・「自給率が減っていることは知っていて、増やしてよと思っていたけど、増やせない理由があることがわかった。」

- ② 前時の感想を読み合い、さらに意見交換する。そして、「日本の食糧自給率を上げる方法はないのか」自分の考えをもち、発表し合う。

【子どもたちの声より】

- ・パンの値段を高くする。
- ・パンの原料を小麦から米に変える。
- ・米を使った料理本を作ってみんなに配り、お米をたくさん食べて、自給率を上げる。
- ・洋食のよいところをまねする。（品種改良）
- ・洋風化から和風化へ
- ・米をたくさん食べる。 ・農民の給料を上げる。
- ・米を作る量を元に戻して、安くする。あまった米は冷害の時も大量輸入しないようにためる。
- ・仕事がない人を農民にする。
- ・田植えの体験や呼びかけをして、農業をやりたいと若い人たちを増やす。
- ・アメリカからの輸入・輸出も禁止する。
- ・外国産の値段を高くする。
- ・スーパーで外国産と日本産のものを同じ値段にする。
- ・日本のまだすまれていない小さな島々を農業用の島に変える。

- ・山地でも育つように米の品種改良をする。
- ・ビルの屋上に小さな田んぼを作る。
- ・バケツなどに、稲を植えて育てる。
- ・山地の一部を平地にしてそこで米を育てる。

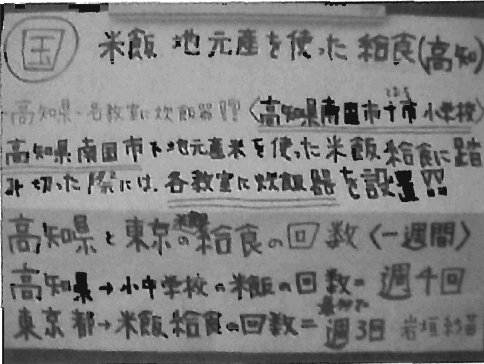
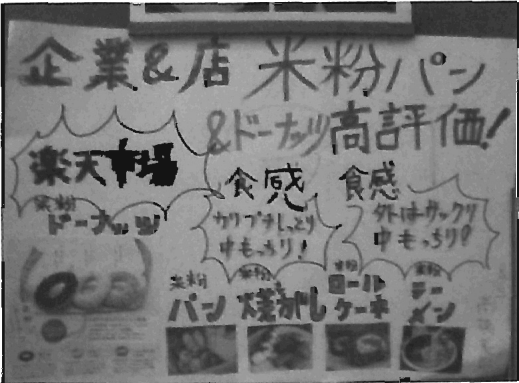
前時の考えをもとに、その考えを進めていく立場は誰であるかを考え、「日本の食糧自給率を40%から50%にあげるためには、国、企業、農家、消費者のどの立場がどのようなリーダーシップを発揮して取り組むとよいか、第一次意思決定をする。同じ立場の者同士で意見交換をし合い、今後調べていこうとすることの見通しを持つ。

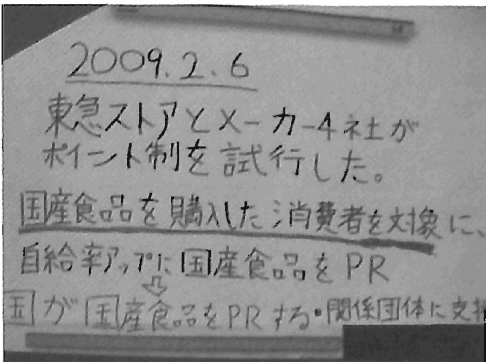
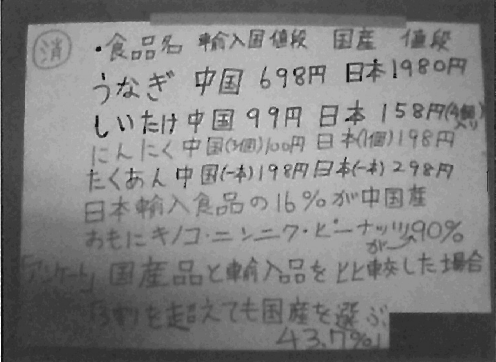
③④⑤ 第一次提案の根拠となる情報を集め、それらの情報を加工しながら、自分の考えをより説得力のあるものにする。

⑥⑦ 第二次提案を行い、友だちの考えとの共通点や違う点を明らかにして自分の考えをふり返る。

(7) 子どもの考えの変容

右の表は、本単元について2人の子どもの考えの変容を追ったものである。

	E児	S児
①日本の食糧自給率を海外と比べた感想	私は自給率、食糧問題がどうなっていくかに興味があった。他の国が自給率が多くて、とても驚いた。	自給率が低いと輸入ができなくなった時に困るから大変だなと思った。
③場面設定に出合った後の自分の考え（第一次提案）	（消費者の立場） 食事を洋風から和風へ変えていけばいいのではないか。	（国の立場） 自給率が低いのは国全体の問題だから、国がもっとリードすれば、国民皆が協力して自給率を上げようとするかもしれない。
⑤第二次提案での自分の主張	（企業の立場） 企業が米のレシピを集めた本を作り、配って、食事を洋風から和風にすることを勧める。	（国の立場） 学校給食の中で、米飯給食の回数を増やす。高知県の小中学校は、現在週4回の米飯給食。東京都は週3回。従ってもう1回増やす。
子どもたちの主張で特に話し合いが多くなされた意見	<div></div> <div><p>← A 「国の立場」 米飯給食を増やし、米の消費量を多くする</p><div></div></div> <div><p>B 「企業の立場」 → 米粉商品を開発して、 米の消費量をあげる</p></div>	

	 <p>2009.2.6 東急ストアとメーカ4社が ポイント制を試行した。 国産食品を購入した消費者を対象に、 自給率アップに国産食品をPR 5か国産食品をPRする関係団体に支持</p> <p>D「消費者の立場」→ 高くても、国産の商品を 買うよう一人一人意識する</p>	<p>←C「店の立場」 国産商品を買ったらポイントがつく 店をよりつくる</p>  <p>食品名 輸入国 値段 国産 値段 うなぎ 中国 698円 日本 1980円 しいたけ 中国 99円 日本 158円(4個) にんにく 中国(4個) 100円 日本(1個) 198円 たくあん 中国(1本) 198円 日本(1本) 298円 日本輸入食品の16%が中国産 おまにキノコ・ニンニク・ピーナツは90% 国産品と輸入品を比べると輸入品の方が安い場合が多い 国産品を多く買えば自給率も上がる 43.7%</p>
<p>様々な友だちの主張を聞き、学習終了時の考え</p>	<p>私は初めに、全体のリーダーシップを果たすべき立場は消費者だと考えていました。でも、だんだんその考えは一人一人ではなく、企業に変わっていききました。それは、企業が一人一人を動かす力があるからと思ったからです。「米粉食品」については賛成です。多分Rさんが米粉パンを食べて心が動かされたのだろーと思いました。逆に、あまり賛成ではなかったK君の「国産食品を高くても買うという考え(上記Dの提案)はいいと思いました、一人一人ができないと思いました。最終的には、やはり、企業がリーダーシップを発揮すべきであると考えました。</p>	<p>私は最初食糧自給率を上げるためにできることなんて消費者にはない！だから国がリーダーシップをとればいいと思っていました。そして調べるうちに給食に地元産を使ったり米飯給食にしたりといろいろな取り組みをしていることを知りました。だから、こういう取り組みを各都道府県の小中学校でやればいいと思いました。消費者のチームは米粉食品を出してきました。身近なことから始めるなら米粉商品を食べる、これが消費者にとって一番大事なることかなと思いました。私は、リーダーシップをとるにはたくさんの企業や国や農家や消費が協力してやればいいと思ひ増す。自給率アップのために身近なことからやっていきたいと思ひます。</p>
<p>考察</p>	<p>E兄の考えは、自給率をアップさせるために、消費者がリードすべきであると考えていたが、調べていく中で、大きな力でこの問題を動かす必要を感じ、企業の立場に変わった。その思いは、話し合いを通してさらに強く感じたようだ。</p>	<p>D兄は、初めから自給率をアップさせるという大きな問題は、国が積極的にこの問題に立ち向かっていくべきであると感じていた。しかし、話し合いを通して、一人一人が地道に取り組む重要性もさらに感じようだ。</p>

(8) 考察

自給率をアップさせるために、子どもたちは、国、企業、店、農家、消費者のそれぞれの立場に立ち、自分の提案に向けて、新聞やインターネットや実際にお店に足を運び、見たりインタビューしたりしながら提案に向けての根拠となる情報を調べた。そして実際の社会の中で、様々な取り組みがなされていることを、話し合いを通して改めて知った。一人一人が地道に取り組んでいくことが必要であると感じた子どもたちは、国や企業という大きな力でより取り組んでいくことの必要性を感じた。一方、初めから国や企業という大きな力で取り組んでいく考えをもっていた子どもたちは、一人一人が痛みを感じながらも、できることはしていく必要性を感じた。いずれにしても、この問題は減反政策の見直しは今、注目されているように、米の消費量を上げることが日本の自給率をあげていくために不可欠であるという事実は確認できた。「社会を見る3つの目」への迫り方は、どの立場も大事であるという見方・考え方で終わった点については、今後更に考えていきたい。

4 「携帯電話の優先席付近での使用問題を考えよう」の実践を通して（5年生）

(1) 場面設定

携帯電話を優先席付近で使用する問題について、お客様一人ひとり（わたしたち）、鉄道会社、携帯電話会社のそれぞれの考え方を知り、どの立場の人がどのようなリーダーシップを発揮して問題解決にあたることができるのか、インタビューや新聞記事などの資料から調べ、根拠となる情報を明らかにしながら提案しよう。

(2) 本単元と本単元についての「社会を見る3つの目」

子どもたちは、通信ネットワークシステムの利便性については、自分や保護者の使用状況から感じる事ができていると思われるが、その背後に潜む問題点や危険性についてはまだまだわかっていないところがある。本単元では、通信ネットワークシステムの様々な問題の中から、携帯電話の優先席付近の使用問題について考える活動を通して、「社会を見る3つの目」を育てたいと考えた。交通機関を使って登下校する子どもたちが多い本校の実情から、その問題は日常の中でよく見かける光景だからだ。この問題を解決するためには、一人ひとりの努力はもちろんのこと、鉄道会社や携帯電話会社などの工夫や努力、さらには条例化なども大変重要である。それを、それぞれの立場から提案しながら、どのようなことができるのか現状を調べながら考え、更に提案する活動を通して、情報の受け手としての活用、発信に対して責任をもつことの大切さも考えさせたいと願った。

ア 携帯電話の優先席付近での使用問題については、一個人の工夫や努力では解決できないこと。

イ 携帯電話の優先席付近の使用問題について、一人一人努力しようとする事と、携帯電話会社など企業が進めようとする事は、必ずしも一致しないこと。

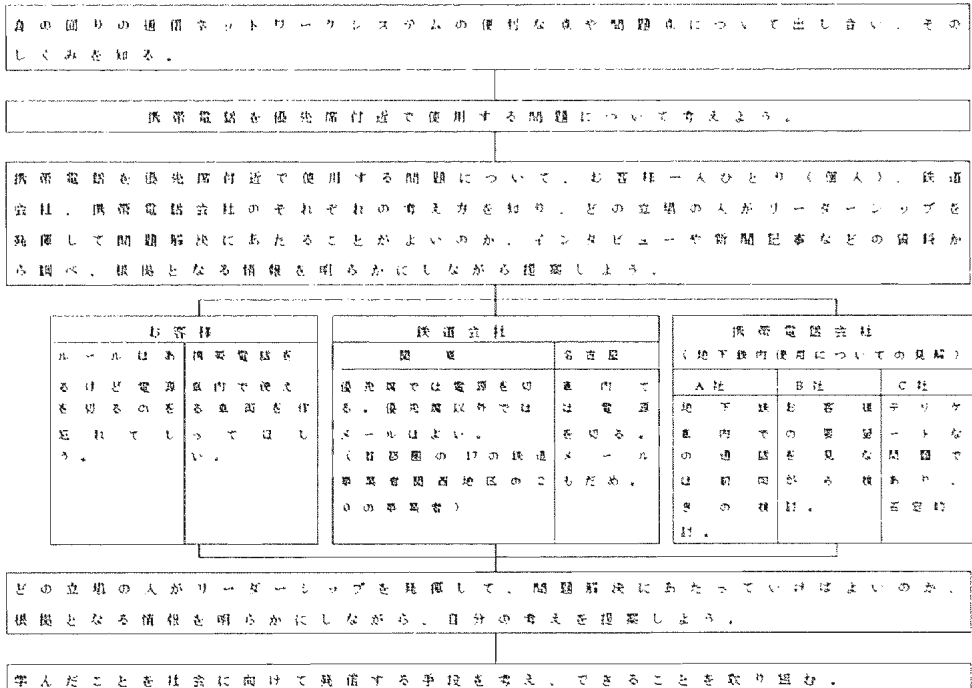
ウ だから、世の中には、広い視野から社会を調整するしくみが必要であるとともに、一人一人の工夫や努力が必要であること。

(3) 単元の目標

- ・インタビューや新聞記事、文書資料などから事実を読み取り、主張の根拠を明らかにする。また、相手の主張の内容や根拠を理解し、様々な立場から判断しようとする。
- ・本問題を通して考えた「社会を見る3つの目」について、自分の考えを書くことができる。

(4) 学習計画

（約 6 ～ 7 時間程度）



(5) 実際の学習

(場面設定) 携帯電話を優先席付近で使用する問題について、客一人ひとり(個人)、鉄道会社、携帯電話会社のそれぞれの考え方を知り、どの立場の人がリーダーシップを発揮して問題解決にあたるのがよいのか、インタビューや新聞記事などの資料から調べ、根拠となる情報を明らかにしながら提案しよう。

(話し合い時の子どもたちの提案と思考の変容)

	鉄道会社・携帯電話の立場	国が進める立場	一人ひとりの立場
提案	①一番後ろの車両に「携帯電話電源 OFF 車両をつくる。 ②電車の改札に携帯電話の電源が ON/OFF になるセンサーをつける。	車内での携帯電話使用を禁止する法律を作るべきである。	一人ひとりがリーダーシップをもつ。国が強制的にやるよりいい。一人ひとりが問題を知って、思いやりの心をもつべき。
提案の根拠	関西の阪急電鉄では、一番後ろの車両に電源の OFF 車両を作っている。しかし、前と後ろにあった OFF 車両が最近1両に減ってしまったが…。	①千代田区のたばこ条例の場合、法律制定前後では 1/10 まで減った。 ②横浜市では、「スマイルマナー向上員」を電車に乗せて呼びかけをする	みんなの声を集める ・思いやりがなさすぎる ・思いやりが増えたらもっと住みやすい社会になる ・命に関わる問題なのに

(授業の考察)

根拠を明らかにして、自分たちの提案を行かせた。話し合いは混沌としていたが、子どもたちは一生懸命友だちの意見を聞き考えていた。その中で、「強制的」という一つのキーワードが出てきた。一つの大きな力(鉄道会社・携帯電話会社・国・団体)として「強制的」にやっていくべきなのか、強制的より一人ひとりが気をつけていく方がよいのか。左下が話し合い後の子どもたちの考えである。

	鉄道会社・携帯電話の立場	国が進める立場	一人ひとりの立場
話し合い直後の感想	鉄道会社と携帯電話会社が連携すべき N 日本人が思いやりのない人というのには認めたくないけど強制的にやるしか方法はないと思う。U	今まで広告などでいっているが、ぼって来たがほとんど効き目がなかった。もう強制的にやるしか手はない。広告を減らしても効き目は変わらないと思う。Y	国が強制的にすべき。それは、今の若い世代が国がやらないことにはマナーを守らない人がほとんどだと思ってる。H 一人ひとりがいい。使用しないよう心がけている人、そういう人に声をかけてもらえばいい。W 今日、一人ひとりがきちんとやるのを現実させるのはかなり難しいけど、強制的にすると、反発する人も多いから協力しあうのが第一。T

「強制的なのか否か」ということに論点を絞り、もう少し話し合いを進めた。そして、この問題の中で一番大切な存在であるペースメーカーをつけている人の考えを新聞記事から紹介し、自分たちの話し合いを振り返らせた。

ペースメーカーをつけている人の新聞投書の記事を読む →

	強制的にや っていくこ とも必要だ が、一人ひ とりがやっ ていくこと も必要	ペースメー カーの人を 重く見る と強制的 の方が いいけど、 人間全 体を重く 見るのと 一人ひと りの方が よくてど っちもど っち。	ペースメー カーを使 っている 人のこと をちゃんと 考えてい きたいと 思った。 それがだ めだった ら、国が 動くのも いいと思 う。	強制的に やるべき だと思っ ている が、ペー スメーカ ーの人 も含め てみんな が思い やりを持 つことが 第一。だ か らその気 持ちは いいと思 った。	ペースメー カーをつ けてい る人は まだ注 意してい るかい ろ。私は 、みんな が信用 できな いので は、私 は、み んなが 信用で きるよ うな人 になっ ていき たいと 思う。	一人ひと りと国 が関わり あうの は大切 。どち らも欠 かせな い。
--	---	--	--	---	--	--

紹介した新聞記事

…優先席に座った女性が「携帯電話をお持ちですか。私はペースメーカーを入れてますので電源を切ってもらえますか」と近くの私たち一人ひとりに丁寧に言いました。…彼女を見て、改めて電車では他人を気かけないといけな

(朝日新聞 2008.1.17)

(6) 子どもたちの思考の変容

前ページの子どもたちの社会的価値判断力の変容を追ったものを、もう少し丁寧に読み取ってみることにする。子どもたちの社会的価値判断力を高める要因は様々である。それは、他者との出あいや友達たちとの話し合い、教員の投げかけなどがある。以下に、2人の子どもの事例を紹介したい。

① 様々な方法で情報を収集する子どもの姿

N児は、第一次提案で「電車の中に携帯電話を使っちゃいけない車両をつくる」と考えた。そのきっかけは、教師がこの問題を投げかけた新聞記事に、関西地方での取り組みが書かれていたからである。その後、関西地方でのその取り組みをインターネットで調べていたN児には気になることがあった。それは、初めは電源OFF車両が2両だったのに、最近になって1両になってしまったことだ。しかし、ネットではわからなかったのを、教員の勧めで、阪急電鉄に電話で問い合わせしてみた。電源OFF車両はなかなか徹底されず、相変わらず車両で携帯電話を使用している人はいるが、阪急電鉄は諦めずに取り組んでいるということであった。できることから少しずつでも取り組むことの重要性を感じたN児は、東京ではまだ電源OFF車両がないので、関西の取り組みの事例を根拠に、この提案への思いを強くした。今回、ネットや電話などで、できるだけ詳しい資料を収集しようとする点はN児が伸びたところである。しかし、他の鉄道会社と比較してこの取り組みの効果をさらに検証するという、一歩踏み込んだ提案までには至らなかった。子どもたちには、情報を選択し、情報の信憑性を評価するまで力をつけていく必要性を感じた。

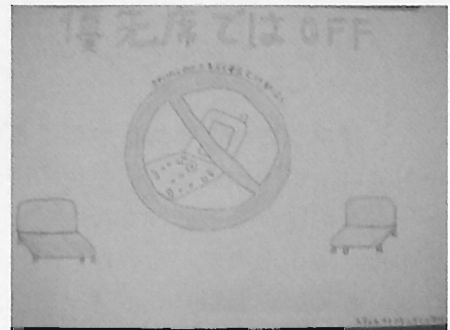
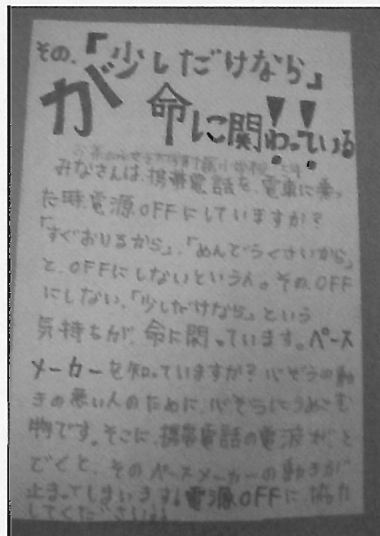
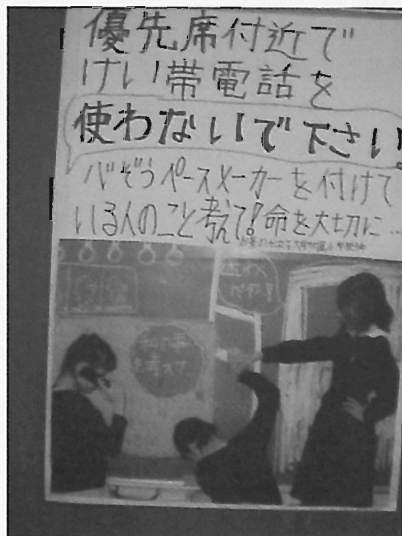
② 他者の視点をもとうとすることができた子どもの姿

Y児は、第一次提案では「国が法律を作って厳しくする」という考えだった。自分の意見を裏付ける資料として教員からの投げかけで千代田区のたばこ条例を調べることにした。そして、たばこ条例を敷いた後には、路上たばこが1/10まで減った事実をつかんだ。そのことから強制的に取り締まることの大切さをより感じたようだ。さらに、他の立場からの提案でも、強制的に進める意見が多かったため、益々自分の考えを強めた。その後、教員がペースメーカーをつけている人の投書記事を紹介したところ、Y児の考えに変化が起きた。法律で罰することよりも、一人一人の努力や配慮を大切にしようとするのが、この問題の解決には大事だと感じたのである。ペースメーカー使用者という問題の当事者の立場（他者の視点）の声を聴くことが、子どもの考え方に大きな変化を起こしたのである。子どもの価値観を揺さぶる教員の役割の重要性を強く感じた。

(7) 学習後に生まれた子どもたちの行動 ～社会的価値判断力の高まりから社会参加へ～

一人一人が思いやりの心をもって、自分から取り組む大切さを主張し続ける子どもたちもいた。しかし、学級全体としては、強制的にやっていくべきだという考え方が圧倒的に多かった。そこで、教員が異なる立場からの視点を与え、揺さぶりをかけた。ペースメーカーをつけた人の投書記事をきっかけに、「強制的にやることも必要であるが、一人一人が思いやりをもって取り組むほうが社会としてはよい」と考えを変える者が多かった。結果的には一人一人が自分からマナーを守ろうとする社会のほうがよいと感じた結果となった。そして、子どもたちが自分のことばで「社会を見る3つの目」の見方・考え方を語った瞬間であった。

学習の終末を迎える頃から、子どもたちが「多くの人々にわかってもらいたい」という気持ちを持ち始めたので、みんなに伝えやすい方法を話し合い、関係諸機関にお願いし、ポスターを貼らせてもらったり、子どもたちが駅長さんに案を伝えたりした。また、本大学構内でも、大学生や教職員にチラシを配り、優先席付近で携帯電話を使わないことをアピールした。この問題に真剣に向き合ったからこそ、子どもたちは社会に対して何らかの働きかけをしたいと願い、子どもたち自らが社会に飛び出したのである。社会的価値判断力という「リテラシー」をじっくり育てることが、自然と「社会参加」という結果を生み出したのである。子どもが願った時に行う「社会参加」を、今後もめざしたい。



(駅構内や大学などにはらせていただいた、子どもたち自作のポスター)

(8) この授業を参観してくださった先生の評価

古賀毅先生（日本橋学館大学）による評価

携帯電話（以下ケータイ）を取り上げる授業は、小中高大いずれにおいても関心を惹きやすく、社会のさまざまな要素に展開していけるものになっています。ただ、種々の実践報告や教職科目受講生の指導案などを見ていると、「ケータイのよいところと悪いところを出し合い、どうすればケータイをうまく使っていけるかを考えさせる」といったものが多いのに気づきます。身近で関心を惹きやすいテーマは、低レベル化するリスクを同時にはらむようです。

小学校高学年は、自律への意思が芽生え急成長する時期で、もっていない児童の所有欲求が高まり、その道具への期待がふくらむ年代と考えられます（通学圏の広い貴校では保有率がより高いものと推察します）。自律の時期だからこそ、自分自身の問題として、そして自分自身と社会の問題としてケータイを認識する必要があります。社会（市民）科では、マナー指導に陥することなく、社会一般の問題へと視野を広げるきっかけにすることが望まれます。

このテーマの指導の難しさは、IT化といわれる事象の性質に由来するものです。いわゆるIT化は1990年代に急速に展開し、2000年代に入ってから質・量両面でさらに奥行きを見せるようになりました。2000年代に入ってから展開は、それが単なる技術的進歩や商品としての普及にとどまるのではなく（その段階では、教育が果たすべきはまずマナー指導でした）、人間・社会そのものの深く入り込んで複雑に浸透し、それらを変えていっている点に特徴があります。小学生の学習を想定した場合、事象そのもののとらえ方が年ごとに急変しますし、学習課題もそれに伴って変化します。そして、児童はおとなである企画者（教員）と違って、「変化」を体感するような時間的感覚をもちませんから、企画者の側が設定した学習課題の意味を内面化することができない、というズレを生じることが多くなるようです。私たち自身の社会認識が真に望まれる単元といえるかもしれません。

今回の実践では、「情報社会に生きる」という単元名が付されていきました。「情報社会」と「生きる」のいずれに重点を置くかで単元設計が変わってきそうです。ただ、公開授業での目標が「どの立場の人が…問題解決にあたっていけばよいのか」と、IT化とか情報社会の問題に必ずしも収まらないところに設定されているため、単元目標と本時の目標とがいま一つ整合しないように見えます。これは、「社会を見る3つの目」を意識されたゆえのことと思いますが、ケータイという食いつきのよいテーマを撒き餌にして児童の意識を個人・社会の一般的視野に導こうとするなら、次時のまとめで「今後どのようにして通信ネットワークシステム社会とつき合っていけばよいのか、自分の考えを意見文にまとめる」というのは、せっかくの一般的思考がテーマ別のものに戻されてしまうのではないのでしょうか。

話し合いでも指摘したように、「リーダーシップを発揮して、問題解決」という設定が、児童の発表に

おける歯切れの悪さにつながっているようです。発表されたものはいずれもしっかりしていましたが、3つないし4つの「立場」に分類可能かといえば、微妙だったように思うのです。

イニシアチブに替えればよいかというと、そうとも言い切れません。佐藤先生は「主導」「先導」「最初のきっかけ」というところに軸を置いて考えられたのだと推察しますが、市場原理が幅を利かせる現代のグローバル社会では、むしろ「最終的に責任を負うべきは誰（どこ）か」という点が重視されるからです。私思うに、ここで明らかにするべきは、鉄道会社、ケータイ会社、国または自治体、そして利用者または「私たち」が、相互にどのような作用を及ぼしているか、及ぼすべきかということでしょう。すなわち、まずは鉄道会社の立場に立ったとして、ケータイ会社・国・利用者に何をどのように要請し、要求し、措置するかを考察させる。次にケータイ会社の立場で……と考えさせるわけです（社会的関係の立体化）。最も大事なことは、「私たち」の立場でどうなのかということ、そして「私たち」が「社会を調整するしくみ」の根幹である国家に対していかに（直接・間接に）参加しているかということを考えさせることではないでしょうか。

児童の発想にあるか定かではありませんが、「メディア」の役割もまた少なからぬ意味をもっています。認識の複雑化がよいとも思えないのでこの単元に取り入れるかの判断は難しいですが、視野の中には入れておくべきかと思います。

なお、一般の小学校（中学校でも可）を想定した場合、この単元では、道徳の時間との関連づけをおこなって、両方のアプローチで認識を深めさせることが有効だと思います。道徳のほうでは、「電源オフを知っているのに、人は（自分は）なぜ怠ってしまうのか」「自分自身への言い訳をいうとすれば、それは？」といった問いかけで、人間（おとな）のもつ弱さや自己中心性を浮かび上がらせるとよいのではないかと。また、「禁煙と書かれた電車の中でタバコを吸う人はいないよね。それなのにケータイはどうしてやっちゃうのかな」という問いは、ケータイのもつ性質と、それが人間性に与える負の影響を明らかにすることでしょう。

(9) 考察

話し合いの最終的な価値の対立は、「強制的か否か」ということから、「ルールかマナーか」ということに着目していった。初めは、現状を考えて強制的にやっていくべきだという考え方が圧倒的に多かった。しかし、話し合いを進めていく中で、強制的にやることも必要であるが、やはり一人ひとりが思いやりをもって取り組んでいく方が社会としてはよいと言う考えをもつ子どもたちが多かった。古賀先生がおっしゃっていることの中に、「最も大事なことは、『私たち』の立場でどうなのかということ、そして『私たち』が『社会を調整するしくみ』の根幹である国家に対していかに（直接・間接に）参加しているかということを考えさせること」と書かれている。「ルールかマナーか」の話し合いで終わるのではなく、もう一步突っ込んで、どうそれぞれの立場からこの問題を調整していくことができるかを練り合う必要性も感じた。

V 研究の考察

1 時事問題を扱う難しさ

「社会を見る3つの目」を育成するためには、時事問題に出あわせることが必要である。4つの実践は、どれも、社会の中で実際に話題になっている問題で、それらは、子どもたちにとっても身近な問題として考えられる良さがある。一方で、それらはまた、様々な問題が複雑に絡んでおり、その社会の仕組みを子どもたちがどこまで理解できるかという問題を抱える。例えば、食糧自給率問題では、食糧自給率を上げるための方策として、減反政策が出てくる。このことの意味は理解できても、生産調整すれば政府からどのくらい補助金が出るのかや、減反政策に賛成する立場と反対する農家それぞれの考え方の違いなど、小学生にとって理解するには大変難しい部分もあった。だからこそ、子どもたちがより身近に感じ、理解しやすい問題をいかに教員が用意できるかが問われる。そのためにも、わたしたち教員・

大人が日頃から社会にアンテナを張り巡らせ、時事問題に目を向けていく必要性を日々感じている。

2 情報収集

時事問題に対する情報の入手は、その問題が刻々と変化するものであるが故、インターネットからのものも多いことは否めない。しかし、あまりの情報量の多さや、どこまで信用していいものかと言うことは、きちんと子どもたちにも認識させねばならない。よって、教員も子ども向けに資料を用意する必要性を感じる。また、インターネットからの情報は、「インターネットで調べました」といういい方ではなく、「〇〇のサイト(HP)に書いてありました」ということが言えるようにしておく指導が大事である。

3 子どもたちの葛藤

子どもたちは、社会の中で実際に起きている問題を解決するために、「一人一人がもっと努力しなくてはいけない」や、「一人一人ですべてできないんだから、もっと強制的にやった方がいい」「いや、やっても仕方がない。」と様々な考えをもつ。それが、話し合うことで、「一人一人の努力も大事であるが、みんなでやっていくことも必要なんだ」そんな見方が生まれてくる。その両者の考えが行きつ戻りつして、「自分の都合」と「みんなの都合」のせめぎ合いの中で、どうお互いが痛み分けしながら、よりよい道を見いだしていくことができるか、そんな葛藤があったのは確かである。「社会を見る3つの目」が、子どもたちなりの言葉で語られ、社会に何か働きかけたいという行動にまで及ぶ実践もあった。そういう意味では、小学生から、社会で問題になっていることを積極的に取り上げ、子どもたちに見えない社会の仕組みを考えさせていく必要性を改めて感じる。

4 「社会を見る3つの目」を改めて考える

様々な実践を重ねたり、授業を見ていただいた方々からご意見をうかがったりする中で、「社会を見る3つの目」について、今年度、「市民」部で改めて見直しを始めた。それは、冒頭に記した「社会を見る3つの目」の「ウ」である。

それは、「ア」で述べている「一個人の工夫や努力」と「ウ」で述べている「一人一人の努力が必要である」では、一人一人の工夫や努力に段階の差があると考えたからである。そこで、そこに差異をつけるために、「ウ」を、一人一人にできなからこそ、社会を調整する仕組みを形成する必要がある、その形成するものこそが、一人一人の個人であると、いう意味を加えるために以下のように修正を加えた。

ア 社会には、一個人の工夫や努力で、できることと、できないことがあること。

イ 自分の利益と、他者やみんなの利益は、必ずしも一致しないこと。

ウ だから、世の中には、広い視野から社会を調整するしくみが必要であるとともに、それらの仕組みに対して関心をもち、自ら働きかけようとする意識をもつことが必要であること。

【参考文献】

- ・『提案する社会科』 小西正雄著 明治図書 1994年
- ・『「提案する社会科」の授業①～③』 小西正雄著 明治図書 1994～95年
- ・『未来志向の社会科授業づくり』 小西正雄編著 東京書籍 1997年
- ・『シティズンシップ教育思想』 小玉重夫著 白澤社 2003年
- ・「フランスにおける初等・中等カリキュラム改革の動向」 古賀毅
（『日仏教育学会年報』第8号所収 2002年）
- ・『公共性』 斎藤純一著 岩波書店 2000年
- ・『社会科教育研究2000年別冊
21世紀に向けてどのような公民的資質を育てるか』 ー日本社会科教育学会

- ・『社会科教育－シティズンシップ教育－』明治図書 2005年 1月号
- ・『小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の内容・方法の研究開発 平成20年度研究開発実施報告書』お茶の水女子大学附属小学校2009年
- ・『社会科重要用語300の基礎知識』森分孝治・片上宗二編著 明治図書2000年
- ・『児童教育13』お茶の水女子大学附属小学校児童教育研究会 2003年

【附記】

本実践を行うにあたり、多くの先生方にご助言を賜った。特に「市民」研究部会の助言者であった、目賀田八郎先生、梶井貢先生、小玉重夫先生、水山光春先生、小西正雄先生、そして、「市民」部員の遠藤修一郎先生、岡田泰孝先生にも多くのご指導をいただいた。ここに、関わってくださった先生方に、改めて感謝の気持ちを表したい。

(2010. 1. 31)